



Title	漂流民と身体：日露文化交流のチャンネル
Author(s)	生田, 美智子
Citation	大阪外国語大学論集. 2000, 22, p. 177-192
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79822
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

漂流民と身体

— 日露文化交流のチャンネル —

生 田 美智子

Японцы, потерпевшие кораблекрушение у берегов России, и способы их общения с внешним миром

Митико ИКУТА

Японец с разбитого бурей корабля, как свидетельствуют документы прошлых лет, впервые оказался в России в 1697. С тех пор такие "гости поневоле" не раз прибывали на российскую землю.

В те времена японцам было запрещено бывать за границей, и в случае возвращения назад, в соответствии с "Указом о закрытии страны", им грозила смертная казнь. Первый моряк в японской истории токугавского периода, который своими глазами увидел чужую страну и ее людей, прожил в России несколько лет, а потом вернулся и не только не был казнен, а даже получил возможность рассказать о виденном, был Дайкокуя Кодая. Примечательно, что Кодая рассказывал не только то, что видел, но и то, что слышал, осязал, обонял, наконец, и даже о том, что онел на чужой стороне, передавая ощущения всех своих органов чувств. В то же время и его соотечественники судили о том, что Кодая увидел и пережил, не только по его рассказам, но и по его изменившемуся внешнему виду, по дикийным чужеземным вещам, привезенным им из России, по его движениям и жестам, то есть используя все те данные невербальной информации, которые содержались в общении.

В данной статье мы постараемся показать, во-первых, как именно, по нашим предположениям, японцы и русские могли общаться между собой (ведь сначала они совсем не представляли себе языка друг друга); во-вторых, попробуем представить себе, какую роль в этом общении могла играть пластика и телодвижения; в-третьих, на основе рисунков и пояснений к ним, описывающих вещи, представленные на выставке имущества Койти (спутника Кодая, вернувшегося с ним и умершего на русском корабле), мы попробуем выяснить, что более всего интересовало японцев того времени и как они воспринимали русские реалии.

Анализ таких типов информации, передающихся по каналам невербальной,

предметно-пластической сферы общения, поможет, как мы надеемся, понять и описать процесс постепенной психологической адаптации японцев к русским и их культуре. Привычные стереотипы отношения к русским как к "красным варварам", разбойникам, постепенно размывались, японцы начинали видеть в русских таких же людей, как они сами, со сходными чувствами, но с иным языком, стали подмечать черты сходства и отличия между русским и японцем.

1 はじめに

ロシアが日本人漂流民に最初に出会ったのは1697年のことであった。記録に残るロシアへの最初の漂流日本人は、カムチャッカでコサックの隊長アトラソフに発見された伝兵衛という人物である。もとより伝兵衛以前にも、カムチャッカや千島列島、樺太に漂着した日本人はいたであろう。だが、そこに居住していた原住民は文字をもたなかったのも、想像するしかない。シベリアは17世紀前半にはロシアのものではなかった。イワン雷帝の時代、ロシアはヴォルガ河をこえて東に進出、1648年にはついに太平洋に現れる。文字を持つロシアがシベリアを征服、日本の隣国となって日本人漂流民は記録に留められるに至ったのである。伝兵衛の場合もコサックの隊長アトラソフに発見されなかったならば、その存在を知られることもなく、没していたであろう。

1702年、ピョートル大帝は、伝兵衛を謁見し、ロシア語を習ったうえで日本語教師になるように命じる。以来、サニマ、ゴンザ、ソーザ、竹内徳兵衛一行と安政元年（1854年）の下田における日露親条約締結まで、管見のかぎり、13件の漂流民が記録されている。

その漂流民群像のなかで身体の観点からすると光太夫のケースが興味ぶかい。鎖国時代の漂流民は予備知識のないままいきなり異文化の世界に放りこまれた。かれらの異文化体験が興味ぶかいのは、純粋な異文化コミュニケーションの生成過程が分かるからだけではない。漂流民の身体やかれらがロシアから持って帰ったモノや情報そのものが、幕府の情報統制に新しいチャンネルを開くことになったからである。当時幕府は限られた国々に対外関係を限定・管理し、海外情報も独占していた。もとより「鎖国」時代にも長崎などで西欧人との異文化交流はあった。漂流民の場合は「鎖国」体制の枠をこえた現地で西欧人と直接身体的に交差したところに特徴がある。

漂流民の身体はその異国性ゆえにロシアでも日本でも情報を発信つづけた。漂流は従来、国家と国家の関係として議論されることが多かった。ここでは権力のレベルではなく、漂流民という個人の身体にこだわって、近世人の異文化コミュニケーションを通じた異文化認識のさまをみてみたい。

2 相互認識

まず最初に、日本人とロシア人がいかに相互認識したのか見ておこう。

光太夫が伊勢から江戸にむかう途中で遭難し、7ヶ月の漂流のすえ、ロシア領アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着したのは、1783年のことだった。それまでの生活環境から異質な世界に放り込まれたのだ。

うまれてはじめて出会った異文化の人間は、「人とも鬼とも更に弁がたし」という印象を光太夫たちに与える。漂流民が最初に遭遇した異文化の人間は、ロシア人ではなく、原住民であった。かれらは裸足で、手足や顔に入れ墨を施し、鼻輪をし、鼻の孔と下唇には魚の骨をつきさしていた。それから、しばらくして初めて出会ったロシア人は漂流民たちに、「以前の島人とは抜群の容儀」という印象を与えた。これは記録者である蘭学者桂川甫周の西欧的価値観の枠組みにからめとられたというよりも、判断に際し自文化の常識をもちこんだからである。裸足で手足や顔に入れ墨をほどこし、鼻輪をし、鼻や下唇にピアスをした原住民は、日本の日常性において目にすることのない人間だった。さらに日本人の衛生感覚には、原住民の衣食住文化よりもロシア人のそれの方が受け入れやすかったようである。伝兵衛がロシアでとられた供述書にも「かれら（ロシア人一生田）の食事が清潔なのを見て、餓死しないためにかれらの所へ移った」⁽¹⁾ という一節がある。伝兵衛を発見したアトラソフもクリール人は腐った魚や根菜を食べていたので、伝兵衛の仲間二人は食物があわず死んでしまったと報告している。

光太夫にとり、ロシアは「聞も及ばぬ国」であった。全く予備知識がなかった。ロシア人と原住民は身体的特徴、衣服、生活習慣があまりにかけ離れていたもので、アムチトカ島に二種類の人間が存在することは早くから気付いていた。だんだんとそれがロシア人と島人であると認識できるようになったのである。

一方、ロシア人のほうは何をもって漂流民を日本人とアイデンティファイしたのであろうか。ロシア人と出会った時は遭難してから7ヶ月が経過していた。海難事故にあった時のルーティンワークとして、髷をおとし船内の神棚にそなえ、神仏の加護を祈願していた。石井謙治によれば、難船しながら髪を切っていないとなると万全を尽くさず不心得であるとの追及をうけるので、髪を切ることは信仰もさることながら、誠意のあかしとして後々のためにも必要だったという。⁽²⁾ 従って、ざんばら髪で、月代はそっていなかっただろうし、ひげはのび、着ているものもぼろぼろであったであろう。ロシア人は何を手掛かりに日本人と認定したのか。仙台漂流民の話によると、ロシア人は船のマストが一本であれば日本人と認識したという。この場合も、おそらく1本マストであることを確認したのだろう。仙台漂流民がロシア人から聞いた話によると、帆柱はすべて外国では二本あるいは、三本以上たてており、一本の帆柱は日本船だけだという。⁽³⁾

このような帆柱による日本船識別法が確立していたのは、すでに日本からの漂流が何件かあったからである。伝兵衛のケースでは、すぐには日本人とアイデンティファイしてもらえなかった。かれは大坂から江戸へいく途中遭難したのだが、かれの話を聞いたアトラソフは江戸とインドの発音が似ていることから伝兵衛のことをインド帝国のウザカ（大坂をウザ

力と誤認) 国の人と報告している。日本人であることが判明したのは、モスクワに連行されてからのことである。これは、伝兵衛自身がロシア語に慣れたこと、モスクワの役人のほうがアトラソフたちよりも世界地理に通曉していたこと、伝兵衛に「日本国のことを記述した本の図面」を見せるといふ、新しい生国判定方法が導入されたからである。

光太夫はロシア人と原住民がせめぎあう植民地空間に漂着したわけだが、ロシア側の人間に組み込まれる。なぜ、島人と同列に扱われなかったのであろうか。かれらの扱いの背後にあったのは日本へのあこがれである。

日本はマルコポーロの昔から黄金の国であった。たとえば、1675年、モスクワ政府は中国にロシア使節スパファーリを派遣し、中国とその近隣諸国に関する情報収集を命じたが、その際スパファーリに覚え書きが与えられたが、そこには次のように日本のことが記されてあった。

中国東方の大洋中に、中国沿岸から七百露里離れてヤポニヤという非常に大きな島が横たわっている。この島には支那国におけるよりも大きな富が存在し、金銀鉍その他の財宝が見出される。⁽⁴⁾

この「黄金の国」イメージを増幅したのが、日本からの漂流民の供述である。たとえば、1702年に伝兵衛は、日本では「皇室、幕府、大宗の神殿は金張りで造営され」、「その地には金・銀が豊富にある」⁽⁵⁾ といっている。

さらに19世紀になると「白水境（ペロヴォージェ）」という旧教徒（17世紀中葉のニコンの教会改革をみとめず、ロシア国教会から分離したグループ）の理想郷が日本にあるというユートピア伝説も加ってくる。中村喜和の研究によれば、日本まで白水境を求めてやってきた旧教徒がいるという。⁽⁶⁾

日本がインペラートルの国であるという認識も大きく作用した。光太夫がロシアに漂着する49年前の1734年には、ロシアではじめて日本に関する文献『日本誌』が刊行された。筆者が見た1768年版（ペテルブルグのロシア国民図書館所蔵）に次のような記述がある。

現在の日本帝国は、多くの島々から成り、しかも、これらの島々のある部分は、島ではなく半島かも知れないということである。⁽⁷⁾

『北槎聞略』には帝号をもつ日本国の人間に対する取り扱い方に関して次のような記述がある。

帝号を称する国をイムペラトルスコイといひ、王爵の国をコロレプスツワといふ。彼邦にて他邦の者どもおち合、互に其許の国は何国にて何爵ぞと問とき、コロレプスツワなりといへばとり合者もなし。イムペラトルスコイなりといへば席中形を端し上座を譲ると也。……されば光太夫等何方に行ても少しも疎略にせられざりしなり。⁽⁸⁾

そうしたロシア人の日本観の現れは語学学習にも現れている。ロシアはシベリアを征服し、異なる言語をもつ諸民族を支配下においたが、かれらの言語を学習対象とすることはなく、ロシア語をおしつけ、自分たちに同化させた。しかし、日本人にはロシア語をおしつけることはなく、日本語を学習している。その開始時期に関しては、伝兵衛を教師として日本語学校が開設されたという1705年説と1736年のゴンザを教師とするアカデミー附属日本語学校の設立をもって嚆矢とする説があるが、いずれにせよ18世紀前半には日本語学習は開始されている。仙台漂流民を送還してきたロシア使節の団長レザノフも日本来航にそなえ、日本語を学習だけでなく、自家製の露和辞書（サンクト・ペテルブルグの東洋学研究所所蔵）も作成している。それだけではない。すでに述べたように、1734年には『日本誌』という単行本がロシアのサンクト・ペテルブルグで出版されている。

3 異文化認識と身体

次に身体を通じた異文化認識と自己認識の生成をみてみよう。

すでに述べたように、漂流民が最初に出会った異文化の人間は、ロシア人ではなく、原住民であった。言語でコミュニケーションしようとするが、通じないので、物欲に訴え、モノを与えて、コミュニケーション・コンタクトを樹立させる。

とはいえ、モノをプレゼントしても交渉の余地がないこともある。たとえば記録に残る三件目の漂流民であるソーザとゴンザの場合もあらんかぎりの好意をしめし、贈り物をしたが、かれら以外の15名はコサックの隊長シチニコフとカムチャダール人に殺され、船内の荷物を強奪された。コミュニケーションの意図がなく、単に自分に有利になるように日本人を操作しているだけであった。勿論、当時といえどもこのような略奪行為は犯罪でかれらは後に処罰されている。⁹⁾

アムチトカ島に在島していたロシア人は光太夫一行を見て、空砲をうつ。これは漂流民がつつがなく上陸したのを祝福する記号なのだが、光太夫たちは仰天する。ロシア人は日本人に近づくと、何やらものをいいながら肩をなでたり、背中をさすったり、いたわるそぶりをみせる。音声言語テキストは解読不能であったが、感情表情などの身体テキストを参照することで、日本人は空砲が敵意や殺意を意味するものでないことを理解する。

光太夫のコミュニケーションが成功したのは多重チャンネルを多用する対面コミュニケーションに慣れていたからであった。加藤曳尾庵によれば、光太夫は江戸で木綿商人として働いていたという。¹⁰⁾江戸には各藩の藩邸があり、さまざまの方言がとびかっていたであろう。そのような中で商売をするには、言語だけでなく、パラ言語的な要素（声の高さ、強さ、音色、速度といった特徴）に着目し、動作、表情、姿勢、物腰といった身体言語的要素も解読しなければならなかったであろう。コミュニケーションにおいて多重チャンネルを動員でき、身体行動をコンテキストにそくして解読する訓練ができたことが異文化接触の場合、おおいに役だった。

光太夫はロシア人と筆談しようとするが、通じない。幕末に下田沖の津波で船が難破、戸田村に逗留したロシア人の中には中国語の通訳がいたので、筆談が成立した。しかし、ここ

のロシア人は漢字が識別できないので、文字によるコミュニケーションは不成立に終わる。

上陸して身体疲労がどっと出た漂流民は磯辺の岩やに入り、ぐっすり眠りこけるが、ロシア人は終夜岩窟のほとりでこれを守ってくれたという。『北槎異聞』には次の記述がある。

初めより種々に我等をあはれみ取扱し者は、皆ヲロシア人の来りて島に逗留せる者なり。其島人は尤暴悪の夷狄人にて、哀憐の心などある者には非ず。初め島につきたりし時も、ヲロシア人の来り居し者なくが、一行の命いかんとも知るべからず。ヲロシア人は皆官の威令を負て来り居る者故、島人其畏れ有によりて、殺害の事はなかりしと見へたり。⁽¹¹⁾

アリューシャン列島はロシアの植民地的支配とその矛盾が渦まいている世界だった。利害の対立するエスニック・グループが対峙する植民地空間で光太夫の場合も死の危険がなかったわけではなかった。ロシア人は原住民にとらせたラッコやアザラシ、トドといった高価な毛皮を安価な煙草や木綿や牛馬の皮と引き替える不等価交換で原住民を搾取、不当な利益をあげていた。『漂流私記』は光太夫が在島中、原住民が反乱をおこし、ロシア人に鎮圧された際、漂流民はロシア側に与みしたことを記している。⁽¹²⁾

アンドレヤノフスキ諸島の一島に漂着した仙台漂流民の場合もロシア人側に組み入れられている。ロシア人は在島を一年短縮してかれらをロシアに送り届けた。その処置が良かったというので船主は商頭に取り立てられ、褒美をもらったという。ロシアは対日貿易開始の可能性をさぐっていたのだ。

光太夫は島にきて半年あまりは、言葉が通じなかった。「エト、チョワ（これは何か？）」という異文化のコードを探り当てるキーワードを発見して以来、言語コミュニケーションの世界が開ける。

もともと光太夫は船長として船長日誌をつける習慣があったが、これ以降片っ端から単語を書きとめていく。光太夫に識字能力があったことはロシア語の習得におおいに寄与する。聴覚回路でとらえた語をすべて脳にたくわえるのと、日本語表記であれ文字化して備忘録に書き留めることができるのでは語彙力に差がでる。この点は仙台漂流民との大きな違いである。仙台漂流民の場合は上陸後ほどなく病気で船長をなくしている。識字能力の高い船長の死亡はかれらのロシア語力に影響をおよぼす。

光太夫はロシア文字も習得する。ロシア語の文字は表音文字で一定の字形が一定の言語音と結びついている。文字の数と音の数が一致しているわけではないし（たとえば軟母音字 Яなどは一文字が[ja]という二つの音をあらわす）、単独では音価をもたない文字（たとえば軟音符）もあるが、識字能力をもつことは、音のかなりの部分が視覚化されることになる。耳で聞き、手で記録し、目にやきつけ、口で使ってみることで、光太夫はロシア語の語彙をふやしていく。

漂流民はカムチャツカではじめて洋食を食べた。そばをかけこむ時のようなけたたましい音をたてて食べてはいけなかったことや、ご飯をかきこむ時のように器から直に食べてはいけな

いことも習得した。自文化では許容されている身体技法が異文化では不作法を指示内容とする記号として機能してしまうことを知らなければならなかった。

身体に摂取する食物に対する考え方が変わったのはカムチャカに飢饉がおそった時だった。ロシア人は牛肉を分けてくれる。生き延びるためには、肉食タブーをおかすほかなかった。こうして、漂流民たちは自文化の価値観から解放され、異なる生活環境では文化の価値観は普遍的でないことを知る。

髪型も洋髪にあらため、洋服も着用するようになった。ぴったりした筒袖で、襟元はつまっていた。光太夫は洋服になかなか慣れなかったようである。カムチャッカでは光太夫は寒い気候でも常に腕と首をむきだしにしていたらしい。⁽¹³⁾ シャツを着て襟元や袖口をはだけたまままでいることは、その人がその場をどのようなものと判断しているかを伝えてしまう。帰国嘆願運動を展開し、イルクーツクやサント・ペテルブルグの有力者の間に人的ネットワークを形成していくなかで、光太夫は身体のコミュニケーション機能、シンボル機能に敏感に反応するようになる。

ズボンもからだにぴったりしていた。排泄物を排出する際の身体技法も変わっていった。光太夫によれば、ロシアのトイレが日本のようにしゃがむのではなく便座に腰をかけるようになっているのは、「股引きにてつよくしまりいる故、此方の人のごとくとくとかがむこ事なりがたき故なり」という。かがみにくかったというから、休憩するのも床に座るのではなく、椅子に腰をかけるような身体技法に変わっていったであろう。

イルクーツクで漂流民の団結がくずれる事件がおきる。庄蔵が凍傷にかかり、片足を切断し、新蔵も重病にかかったのだ。二人はキリスト教に帰依、日本への帰国を断念する。二人ともキリスト教の教義に共鳴したわけではない。身体の一部の欠損や身体の衰弱の意識が、ロシアに残留するという別の生のスタンスをとらせたのだ。新蔵はのちに健康を回復するが、庄蔵は身体的欠損を背負って生きることになり、残留の二人の関係にさらに亀裂が生じる。仙台漂流民の場合も洗礼を受けた帰化グループと帰国を希望するグループが対立する構図を見せるが、かれらの場合の帰化は身体欠損や衰弱の意識とは結びついていない。キシリョフという日本との交易を模索する大商人の後ろ盾があるロシアでの生活のほうをよしとしたのである。

光太夫はキリル・ラクスマンに出会う。かれは17ヶ国語に通じた博覧強記の学者だった。光太夫はかれのもとで世界を見すえるまなざしを獲得していく。ロシアと通商している国や帝号を有する国の名を日本を含めて52も列挙したり、世界地図に関心をもったり、世界の中にロシアや日本を位置づけることができていく。その過程で「大日本伊勢国大黒屋光太夫」という意識をもつようになってくる。幕藩体制時代にこのような自己認識がでてきたのは、帰国を実現するには対外的な交渉権をもつ幕府を相手にしなければならないこと、また世界地図上で伊勢や江戸が日本という共同体に内属していることを視覚的に確かめたことによるものだろう。この点は、仙台漂流民との違いである。かれらは世界一周した初めての日本人であるが、広い世界を見すえるまなざしは獲得していない。

ラクスマンは光太夫を首都ペテルブルグにつれていく。女帝に帰国を直訴するためである。

光太夫はロシア宮廷の成員に分有される礼儀作法身を習得していく。たとえば、エスコート。肘をささえながら女性と並んで歩くのはそうたやすいことではない。他者を自分のちょうど脇におき、身体的に持続的接触を保ちつつ、相手の速度にあわせて移動しなければならない。席につかせるのも、どこでもいいわけではない。

さらに光太夫は女性をエスコートするのは上流階級だけで、「賤人」はそのような行動をしないことも見抜く。さらに、女性の乗馬の際の身体技法も上流階級では馬に横乗りするが、下層階級では馬にまたがることに眼をむけている。かれにとり身体は帰属階級を見分ける記号でもあった。

ロシアは光太夫にさまざまな身体の相貌をみせた。光太夫はその文化記号論的意味に着目しながら、自分の身体を貴族のそれに同調させていった。

光太夫は身体が表現する文化記号論的な意味をほぼ正しく理解しているが、官等については不正確な理解であった。官等表はピョートル大帝が規律ある国家をつくるべく1722年に導入したものである。14の等級からなる官等表は国家経営のための軍・官機構をつくりあげた。それは文官と武官と宮内官からなっていたが、光太夫のまなざしがとらえたのは武官のみである。これはロシアでは武官が貴族の本領とみなされ、優遇されているうえに、社会的プレステージが高かったからである。さらに江戸時代という武家中心社会のヒエラルヒーのアナロジーをそのままロシアにもちこんだからでもある。しかも光太夫は官等により人間関係が序列化され、敬称、服装、あてがわれる馬の数が異なっているところはとらえているが、全部で19の位階があると誤解している。最下級の14等官があるのは文官と宮内官で武官は13等官が最下位である。光太夫が19あると思ったのは、兵卒やコサックなどの官等表に入らないものも数えたからである。

約10年の滞露生活ののち帰国した光太夫は桂川甫周に「この国の人とは見へず、紅毛人の形に髣髴たり」⁽¹⁴⁾と叫ばせた程、身体をロシア化させていた。

4 見られる漂流民

漂流民はロシアでは日本からの異人であり、日本ではロシアからの客人であった。彼此の地においてその身体には好奇のまなざしが注がれ画像化されている。

ロシアではイルクーツクとサンクト・ペテルブルグで光太夫の肖像画が描かれた。後者の肖像画は現在その所在が分らない。

イルクーツクで描かれたものは、ゲッチングゲン大学に所蔵されているジーファースの記念帳にある。1792年、イルクーツクをたつ10日前に描かれたもので、伊藤恵子はジーファースの作と推定している。⁽¹⁵⁾

ここでは光太夫は和服姿で横をむいているが、顔が大きく、5・6頭身くらいで、随分小柄な印象を与える。レセプスによれば、光太夫は5フィート（約1.6メートル）の背丈だったという。『北槎聞略』にはサンクト・ペテルブルグの遊里で遊女に人気があったと受け取れる記述があるので、もう少し違った造形を期待するが、西欧人の眼に映った日本人男性の特徴を伝えているのであろう。体の線がでる洋服とちがって、和服は直線的でゆったりしている。

レセプスは和服のことを「長い絹の寝間着で、わが国の部屋着に似ていた」といっている。光太夫は帰国直前まで小袖、羽織、袴を持ち歩き、帰国直前に一切合切をキリル・ラクスマンの娘のマリヤに贈っている。

ロシア人は和服におおいに関心があったようで、仮面舞踏会では光太夫の和服を借りて仮装する人が多かったという。また、光太夫がサント・ペテルブルグで学童を前に日本の風俗のことを講演した時には「小袖三つ、袷羽織、綿入羽おり、佩刀一把」を持参したという。それだけでなく和服に着かえるよう要請されている。

仙台漂流民もアレクサンドル帝に拝謁する時和服を着用、日本髪にするよう要請されるが、和服は着古してもっていなかったもので、急遽あつらえている。このようなことができたのもサント・ペテルブルグに和服の見本があったからである、仙台漂流民によれば展示されていたという。縞縹子の着物と羽織、帯を仕立ててもらったという。ちなみに、漂流民はこのロシア製和服で帰国したのである。1999年の10月、仙台でロシア文学会が開催された時、漂流民の子孫のお宅を訪問する機会を得たが、ロシアからもって帰った洋服は一着保存されていたが、ロシアで仕立てた和服はなかった。

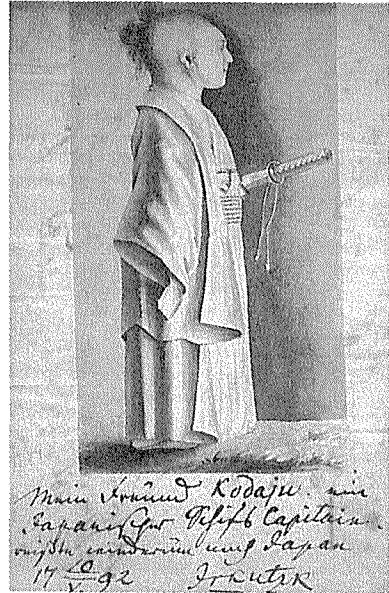
ゴンザとソーザもその身体の像が描かれ、デスマスクがとられた。クラシェンニンニコフはこれに関し次のように言う。

かくも遠い国の人がロシアにいたことを記念してアカデミーが彼らを模写し、顔の石膏をとるように命じた。それは現在帝室クンスト・カーメラに保管されている。⁽¹⁶⁾

残念ながら現在では絵もマスクもその所在が不明である。現在クンスト・カーメラにかねらのデスマスクが保存されているというのは誤解である。⁽¹⁷⁾ 問題のマスクを発見した村山七郎はこれをゴンザとソーザの蠟製の首としているが、東洋セクションの展示用に作成した全く関係のないアジア人の首の模型だというクンスト・カーメラの職員もいる（アレクサンドル・ミハイロヴィチ・レシェトフ）ので、再調査の必要があるが、今はその問題は保留して、日本人の身体に対する関心を指摘するに留める。

光太夫がロシア使節に送還され帰国したのは1792年陰暦の9月だった。ロシアから帰還した漂流民は光太夫がはじめてであった。漂流民は注目のまゝで、行く先々、つまり根室、函館、松前、江戸でのスナップが描かれている。

最近、ロンドンの古書市場で箱館から松前に向かう光太夫一行八人を描いた「ヨロシア船



In Besitz der Göttinger Universitätsbibliothek
Kopie in Besitz der Stadtverwaltung Suzuka

(鈴鹿市大黒屋光太夫顕彰会提供)。

併人物図」が見つかり、日英交渉の研究家でロンドンの漱石記念館の恒松郁生館長が競売で入手したことが北海道新聞（1999年8月17日付け）や中日新聞（1999年8月18日付け）などで報道された。このニュースを最初におしえて下さり、三枚の図のカラーコピーを恵与してくださったのは中村喜和氏だった。光太夫と磯吉と6人のロシア人（全員に名前が入っている）を描いたものである。

ここでは、日露の身体コードの違いの点で興味ぶかい松前城下を行く洋服姿の光太夫を検討しよう。光太夫を見物している大勢の庶民は、彼を指さして何やら言いあっている。指さしは自分が注目するものに他者を引き込み、注意を共同化し、集団化する作用がある。朝鮮使節の江戸までの道中ではこのジェスチュアは禁じられていたという。蝦夷では、安永以来、ロシアの存在は知っていたし、接触もあったはずであるが、人々はあからさまな好奇心をかくそうともしていない。夏の暑い最中だというのに、光太夫の着ている衣服はからだにぴったりそったものだった。高い襟のシャツのブリーツ状の襟元をぴったりしめ、大きな襟のついた長上着をきている。馬をひいている日本人は着物の後裾を帯のところではしより、裸足で太股まであらわにしている。他の二人の日本人も裸足だが草履をはいている。かれらと対照的に光太夫の足はズボンとブーツでぴったりおわれている。



松前への道中、馬で運送される洋服姿の光太夫と、好奇心もあらわにそれを見物する人々。『魯齊亜国漂船聞書』（東洋文庫所蔵）。

これ以前、日露の政府が正式に面談するに際し、幕府の役人がロシア人の宿舎を訪れ、会見の際の身体儀礼をどうするか話し合った。その際に問題になったことの一つが靴をぬぐか、否かであった。ロシアでは裸足は貧困や不法を指示内容とする記号として機能する。ロシアの作法コードに従う光太夫の身体は顔と手以外はすべて覆われている。

光太夫と磯吉は江戸送りになる。光太夫はどのような状態で江戸に運ばれたのであろうか。それについての現代日本人のイメージを映像化したのが映画『おろしや国酔夢譚』と考えていいだろう。そこでは光太夫と磯吉は手足をしばられ、罪人用の唐丸箆で江戸に送られている。しかし、実際にはどうであったのか。『魯齊亜国漂船聞書』は、次のようにその時の状況を伝えている。

光太夫、磯吉は駕籠に乗り、松前役人並松前の手医者附添先へ行、御目付方は跡より来り給ふ、何れの国にても領地境に至れば役人上下着用、下座して相迎ひ他領境まではを送る。津軽に一日逗留す。道中三度の食事何れにても皆二の膳附也。食事の度毎に役人悉く毒味して食しむ。江戸着の後も皆毒味す。吹上において上覧相済、其後は毒味せず。光太夫、磯吉食事の度毎に甚迷惑せしとぞ⁽¹⁸⁾

絵画情報ではないが、文字でとらえられた身体である。将軍家斉が上覧するまでは、漂流民に万一のことがあっては大変と、医師と毒味役までが行列に加わっている。行く先々の領地では役人はかみしもを着用し、下座して光太夫たちを出迎えている。松前城下でも騎馬姿で通行していたことを想起されたい。山田忠雄によれば、大名のお膝元を騎馬で通行できるのは中級の武士以上の身分に限られていたので、漂流民に対する扱いは破格のものであった。江戸までの道中もかれらが乗っていたのは武士が乗るような駕籠で、無論手足はしばられていない。光太夫たちは身分違いの厚遇がわずらわしいと嘆いたほどであった。映画の中の江戸送りのシーンは鎖国令違反者の身体というコードを用い犯罪人を映像表現したものであった。

江戸城では将軍上覧のもとで取り調べをうけたが、その際光太夫と磯吉は洋服をきて現れた。前代未聞の出来事である。この時の光太夫と磯吉の服装は絵に描かれ、文字でも詳しく記述された。

幸太夫は齢四十二、髻をば三ツに組んで後ろにたれ、黒き絹にて巻き、黒き篋笠を脇ばさみ、襟には、黄金にて造りたる小さき鏡の如き物をかけ、桃色の銀莫臥児にて製したる筒袖の外套に、赤き玉の衣紐を施し、同じ織物の袴をはき、紺地の錦の緊身を着し、足は白き莫大小の上に、黒き百爾西亞革の深沓を履き、魁藤の杖を突きけり、磯吉は歳は二十八、同じさまに髻を組み、幸太夫が懸けたる如き物の、銀にて作りたる物をかけ、笠を取りて脇ばさみ、紺哆囉呢の外套に、銀の衣紐をつけ、緊身は猩々緋に黒き縁を懸けたるを着し、黄黒間道の飛鷲絨の袴を着け、白めりやすの上に深沓をさす、これは幸太夫が沓とは少し違ひて、半より上は柿色の革にて継ぎたれど、製作は同じ様なり、諸共に笠を地に置き、拝をなして床几に座したる体、更にこの国の人とは見へず、紅毛人の形に髣髴たり。⁽⁹⁾

上着やズボンというにおよばず、ボタンやモール、ハイソックス、ブーツ、メダル、髪の毛を留めるリボンの色にまで描写が及んでいる。材質もメリヤス、びろうど、絹、錦等々と詳しく描写されている。これだけディテールにこだわった服装描写は、漂流民の身体がいかに注目されたかを物語っている。昼の休憩後、二人は上着を着換え、光太夫は濃い緑色、磯吉は赤茶色だった。

彼らの服装は文字で記述されただけでなく、絵画でも描かれている。

かれらはカラフルな異国衣装を着ていただけではない。身体技法も異国のものだった。二人は幕閣に対し立礼をし、床几に腰をかけた姿勢で尋問に答えた。二人に向かいあう幕閣はかみしもをつけ、張り出しに正座している。椅子に腰をおろす姿勢は高い位置に座ことになる。しかし、ここでは張り出しのほうが高いので、椅子に腰をかけた漂流民のほうが低くなるようになっている。かれらはブーツ姿、すなわち靴をはいたままである。

日露の正式の会見が松前であった時、靴問題以外に、タタミに座るか椅子に腰かけるか、立礼か座礼かが問題になった。

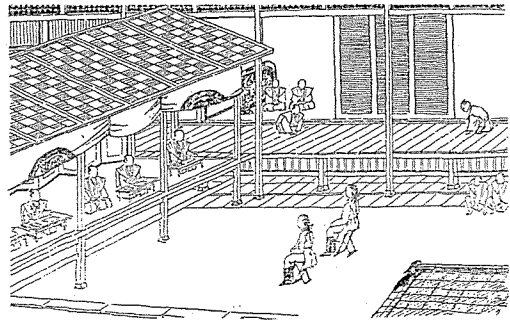
ここ江戸城では見せ物として漂流民にロシアの儀礼コードに従った身体所作を許している。

他の日本人は日本の儀礼コードに従った身体をしている。漂流民の右側の縁側には小納戸がいてその背後は御簾がかかっている。御簾の後ろには将軍家斉がいて、幕閣と漂流民のポリローグを隙見している。漂流民の眼にふれないようになっている。

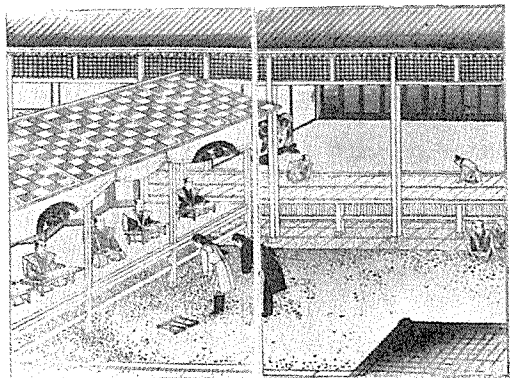
この時光太夫はロシアでのエカテリーナ女帝拝謁を思い出さなかったであろうか。ロシアでは光太夫は女帝を直接眼にただけではなく、女帝に接近し、対人距離をゼロに締め、手に接吻までしていた。また、大広間で椅子に腰をかけていたのは女帝一人であとの四百余人は全員両側にわかれて起立していた。ロシアでは王座は王権の象徴であった。<быть на троне>（王座にいる）という言語表現は、具体的に王座にすわっていることを意味するだけでなく、皇位についていることも意味する。日本では光太夫と磯吉以外全員が床に座っている。ロシアの宮殿と吹き上げ御殿とでは王に拝謁する時の、対人距離、姿勢、からだの向きといった空間の布置、方向的枠組みが全くちがっていた。

日本文化は、握手や抱擁、接吻のような身体接触をともなう挨拶行動の習慣を伝統的にもたなかった。小馬徹によれば、触覚的な感覚を文化的に抑圧することに介在したのは、日本ではヨゴレ（ないしはケガレ）の観念であるという。⁽²⁰⁾ 王ないし王権を身体的に体現している存在として天皇や将軍は秩序と豊饒の源であるが故に、その身体の安穏が五穀豊穡と社会の秩序の実現のために清浄な状態におかれなければならない。 ⁽²¹⁾

光太夫がロシア滞在中に得た異文化認識は、蘭学書桂川甫周の手になり『北槎聞略』や『漂民御覧之記』にまとめられ、異境の壮大な姿として定着した。この世界は当時の日本人からみれば、異常であり、意外であり、



幕閣の尋問を受ける光太夫と磯吉。桂川甫周たちは日本式に張り出しの上に座り、光太夫と磯吉は床几に腰かけている。幕府の下役人は白州の上ではいつくばっている。オーラルな問答だけでなく、「座る姿勢」を介して日露の身体コミュニケーションも行われている。吉野作造『露国帰還漂流民幸太夫』（1924年、文化生活社刊）。



吹上御殿で行われた将軍徳川家斉臨席のもとでの尋問。張り出しの中央に座っているのが桂川甫周。光太夫と磯吉は洋服姿で立礼している。将軍は御簾越しに問答を見物している。『日本漂流譚』第二（1893年11月、学齢館刊、石井研堂コレクション『江戸漂流記総集』第3巻、日本評論社版）。

理解しにくいものであったろう。漂流民の言辞に不信感をあらわにし、反発する知識人もいた。「虚言」（司馬江漢）や「偽りごと」（喜多村筠庭）といった知識人もいた。しかし「赤鬼が住む国」でしかなかったロシアから漂流民がもってかえった「モノ」をみて、普遍的な人間性を認めた庶民も多かったのである。

たとえば、小市の遺品を公開した際の説明のテキストである。幕府は、根室までたどり着きながら上陸を果たせず病死した小市の後家に、銀子十枚の他「小市所持之品」を与える。後家は小市の供養と称してこれを見せ物にして、香料をとる。そのような小市の遺品の展示公開は記録に残るものだけでも、小市の菩提寺である伊勢国若松の宝祥寺（1794年9月）と尾張の一乗院（1795年8月9日から29日までの21日間）でおこなわれている。

入り口で香料をはらい、焼香をすませた観客に各展示場の案内人が、展示品の説明をした。展示されたのは、エカテリーナ女帝の真筆の写し、笠、シャツ、ベスト、ズボン、皮の服、コート、布団、靴、手袋、糸と針、靴じめ、小判、小粒、銅銭、煙管、あかとり、短刀、はさみ、紙、蚊帳、茶碗、茶さじ、髭あげ、木のさじ、頭巾、毛皮の敷物、えりまき、あざらしの皮袋、水合羽、光太夫手跡の掛物などであった。全部、ロシアから持って帰ってきた「モノ」であった。日々の生活習慣や日常の行動が具体化される場合の道具である。たとえば、手袋には次の説明がそえられた。

これハ、此方で申さばめりやすの類ひでござります。至ての寒国でござりまして、冬ハ少でも身を出して居ますれば、其出ておりますだけが、ただくさってちぎれますほど寒ひ国でござりますれど、あの方のしょうぞくでハふところへ手を入ます事が成ませぬゆへ、かやうのものを手にはめますと申す。表ハびらふど、裏ハらつこうと申狐の皮でござります。⁽²⁾

日本の衣服との比較がなされ、生活様式の細部にまで眼がくばられている。日常の生活をかいま見させる説明で、ここには現実への把握にむかうまなざしがある。短刀には次のようなキャプションがあった。

これハたんとと申まして、男たる者ハ一ちやうづゝ所持いたします。これで牛肉などを切にも用ひ、刀にも脇ざしにもこれとござります。御さむらいがたでも、二尺八寸じゃの何のといふ様な長いものハ御さしなさらん。只、さやを木でこしらへまして、いろ／＼彫物などの物好ハいたしてござりまして、中ハやっぱりこれとござります。惣牒、刃物のいらぬ国で、むかしから、腹切たの首討のと申事は一向ござりませぬ。とが人のせいばいのといふ事もなし、錠鍵さへもござらぬ所で、ばんこくながらのゆうこくじゃと申す。あの方でのせいばいと申せば、色道の間違ひ、人の女房盗んだの、娘に手をさいたハといふは、それも七両貳分〔江戸時代、間男の謝罪として支払うとされた金額〕出さざ首よこせといふ様な、そんなきつい事とござりませぬ。其せいばいと申すハ、尻をまくってたゝぎますじゃ。一度たゝ

かれるときついはいじ、二度たゝかれますと最早其所にゃいられませぬ程にはじつゝ
しみます所でございます。(23)

このような認識に庶民が達していたことは記憶しておいていいだろう。すぐに切腹したり、首を討ったりする日本の野蛮な風習にくらべ、合理的なるがゆえにロシアの体刑をよしとしている。実際にはこのような鞭打ちで命を落とす人は多かったし、それは貴族には適用されない不平等なものであったが、ロシアは庶民の間であこがれの国になっていく。牛肉を扱うことに対する嫌悪感を感じさせない記述は興味ぶかい。

理想の女帝としてエカテリーナの人気はたかまり、その肖像画も好まれた。12年後にロシア使節として仙台漂流民を送還してきたレザノフは航海日誌の中で、エカテリーナ女帝の肖像画を大切にしている長崎通詞のことに触れている。

通詞のサキザエモンは水色のレンタをかけたエカテリーナの肖像画をもっている
といった。オランダ人を通じて通詞たちはとりよせたのだそうだ。(24)

光太夫が1795年太陽暦で新年を祝う蘭学者主催の新元会に主賓として招待されたのも、西洋文化の発信者とみなされたからであった。この時の模様は市川岳山が「芝蘭堂新元会図」(早稲田大学附属図書館所蔵)に描いている。ここでは磯吉が洋服を着用、椅子に腰をかけ、光太夫は和服で上座に座り、ナイフ、フォーク、スプーンをつかい、今日の集まりにちなんで、ロシア文字で「一月」とかいている。光太夫には「流槎漫遊九州外 足跡遍歴三世界」、磯吉には「九千里外存知己 五大洲中如比隣」と世界のあちこちに足跡を残し、異国に知己をもつ人を讃える賛がそえてある。

漂流民がみてきたことは怪異変化の世界の出来事ではなく、文明の国の出来事であった。レザノフも「世界を見た漂流民の運命がうらやましい」といった長崎通詞のことばを記録している。(25)

かれらのことを気の毒な犠牲者とみる見方も勿論あった。同じレザノフの日誌は、仙台漂流民の太十郎が自殺未遂をおこしたのは、光太夫たちが故郷に帰れず留置になっていることを知り前途を悲観したからだと書いている。かれらの待遇は今も昔も両義的に理解された。

65才の光太夫が描かれているが、和服の僧姿である。



予が好古の癖を聞て、持帰りたる書籍器物の類、御『我衣』(東洋文庫所蔵)。封印無之物は見せ申さん。我宿へ必来り給へと約して別れぬ。……今は頭髮を剃、手に数珠をかけ居れり。是は舟中にても大願にて、ふたゝび日本に帰国せば永く僧形とならんとちかへたれば也。(26)

この頃でも光太夫の絵が描かれていることに着目したい。光太夫はまだ見られ、描かれる存在であり、死ぬまでロシア情報を発信し続けていたのである。かれの残した多くのロシア文字での揮毫や75歳の光太夫を活写した伴信友の言葉を思い出されたい。

5 おわりに

近世の図説百科事典『和漢三才図絵』(1712年)ではロシアは記載されていなかった。その存在が意識されなかったのである。ところがロシア船が日本近海に出没したり、ベニョフスキがロシアの日本攻撃を警告する手紙をオランダ商館長に送ったことからロシアは北の脅威として意識されはじめる。大槻玄沢によれば、ロシア人は緋ラシャの服を着用している人が多かったので赤蝦夷とよばれ、そこから赤鬼というイメージをロシア人に対し抱いた女子供がいたという。次第に恐怖感が強まっているロシアから帰国した漂流民がもたらしたリアルな情報は異界性を感じさせるようなものではなく、人間存在の普遍性を感じさせるものだった。

文久元年(1860年)に一恵斎芳幾が描いた『万国男女人物図絵』では、英吉利や仏蘭西、阿蘭陀などとならんでロシアが描かれている。そこには腹の無い人間や胸に孔のあいた人間など異界の生き物がまじりこんでいる。『和漢三才図絵』などにある奇態な生き物の名残りであるが、ここでは実在の男女が多くなっていることに注目すべきであろう。

赤鬼が住むと思われたロシアだが、漂流民がもって帰ってきたモノは恐怖感をおこせず、日常の生活をかいまみさせた。漂流民の身体、かれらがもたらしたモノや情報はロシアでは普通の人間が住んでいるだけでなく、合理的な生活をしていることを想像させるものだった。古い枠組みの異界イメージは役立たなかった。漂流民による地理的知識が拡大するにつれ、その異国人たちをどのような枠組みで認識するかという変動がおこりつつあった。

註

- (1) Н. Н. Оглоблин. Первый японец в России, 1701-1705//Русская старина. 1891. No. 10. С. 21.
- (2) 石井謙治「註記漂流覚え書」『日本庶民生活資料集成』第五巻、三一書房、1968年、884頁。
- (3) 大槻玄沢・志村弘強編／杉本つとむ他解説『環海異聞 本文と研究』、八坂書房、1986年、42頁。
- (4) S. ズナメンスキー著・秋月俊幸訳『ロシア人の日本発見—北太平洋における航海と地図の歴史』、北海道大学図書刊行会、1972年、22頁。
- (5) Н. Н. Оглоблин. Там же. С. 23—24.
- (6) 中村喜和『聖なるロシアを求めて—旧教徒のユートピア伝説』、平凡社、1990年。
- (7) Описание о Японе, содержащее в себе три части, то есть : известие о Японе и о вине гонения на христиан, историю о гонении христиан в Японе и последование странствования Генрика Гагенара, которое исправною ландкартою и изрядными фигурами украшено. СПб. 1768. С. 6.
- (8) 桂川甫周著・亀井高孝校訂『北槎聞略』、岩波書店、1990年、248—249頁。
- (9) С. П. Крашенинников. Описание земли Камчатки. Т. 2. С. 204-205.
- (10) 加藤曳尾庵「我衣」、谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第15巻、三一書房、1971年、306頁。
- (11) 大友喜作編『北門叢書』第六冊、国書刊行会、117頁。
- (12) 木崎良平「史料紹介大黒屋光太夫の『漂流私記』」『立正史学』第68号、65—76頁。

- (13) 桂川甫周著・宮永孝解説・訳『北槎聞略』、雄松堂出版、1988年、335頁。
- (14) 山下恒夫再編『石井研堂これくしょん江戸漂流記総集』第3巻、日本評論社、1992年、97頁。
- (15) 伊藤恵子「アッシュ・コレクションの背景（上）」『窓』85号、ナウカ、1993年、24頁。
- (16) С. П. Крашенинников. Описание земли Камчатки. Т. 2. СПб. 1755. С. 225
- (17) たとえば、ボンダレンコはこれをゴンザとソーザのデスマスクとしている。И. П. Бондаренко. Русский язык японских мореплавателей. Нара. 1996. С. 31.
- (18) 『魯西亜国漂船聞書卷之拾』（東洋文庫所蔵）。
- (19) 山下恒夫著『石井研堂これくしょん江戸漂流記総集』第3巻、97頁。
- (20) 小馬徹「身体のパリテイクス」、菅原和孝・野村雅一編『叢書身体と文化2』、大修館書店、1996年、390頁。
- (21) 黒田日出男『王の身体 王の肖像』、平凡社、1993年。
- (22) 山本祐子『『猿猴庵合集 六編』－影印と翻刻』、『名古屋市博物館研究紀要』第11巻、名古屋市博物館、1988年、8頁。
- (23) 同上、9頁。
- (24) Журнал путешествия двора его императорского величества действительного камергера Резанова из Камчатки в Японию и обратно в 1804,1805 годах. В кн. : Командор. Красноярск. 1995. С. 133.
- (25) Там же. С. 152
- (26) 加藤曳尾庵、前掲書、306頁。

(1999.10.14受理)

引用に際してルビは省略し、句読点は適宜これを補った。